



# LA NOUVELLE

## N°9

### AUTOMNE

東京外語仏友会  
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10  
本郷サテライト 東京外語会気付  
発行責任者 藤倉洋一 (昭45)  
2012.9.25 発行

## 「気づき」を求めて・・・ご挨拶に代えて

新会長 藤倉洋一 (昭45)

この4月の総会で、神奈川孝子大先輩より仏友会の会長を引き継ぐことになりました。大変微力ではございますが、2年間、気負うことなく、自然体で、楽しい仏友会を目指したいと思いますのでよろしくお願いたします。

神奈川前会長は、2008年に渡辺元会長よりバトンタッチされ、2期4年間にわたり、その繊細な感覚と人を包み込むようなリーダーシップで仏友会を牽引していただきました。特に、会報誌『La Nouvelle』は前会長の発案により創刊されたものです。また、時を同じくして、副会長の相馬さんと幹事の富山さんが、幹事から退かれました。前会長の片腕として、相馬さんはそのコネクションの広さで、富山さんは堅実な事務と料理の手配・盛付などで腕を振われ、仏友会をこれまでになく充実したものにさせていただきました。感謝申し上げますとともに、引き続き陰に陽にご指導賜りますようお願い申し上げます。

総会では、私のほかに11名の方が新幹事に就任しました。この中から、副会長を、川口裕司先生(母校教授、昭56年)、金澤脩介さん(昭43年)、和賀千恵子さん(昭45年)にお願いし、川口先生には引き続き母校と現役学生のパイプ役を、金澤さんと和賀さんには全体の運営を補佐していただくことにな



りました。新幹事の顔ぶれは、次ページの「新幹事からのご挨拶」をご覧ください。

仏友会は会則にもある通り、“友情を大切にする親睦団体”です。フランス語やフランスという共通の基盤を切り口にしたご縁を大切に、このスピーディな時代、バーチャルではなく、くつろぎの空間で実際に顔きあいながら、おしゃべりできる場と機会を提供できればと考えております。会員の皆さまからも刺激をいただき、たくさん「気づき」を見つけつつ、楽しい企画を行っていききたいと思います。

仏友会の会員の皆さまからは、ご提案やヒントを頂戴し、幹事の気付かないあまたの点をご指摘いただきつつ、温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(2012.7.1)

## 会長を交代します

— Merci beaucoup à tous!

神奈川孝子 (昭37)

渡辺昌俊先輩から会長を引き継いで4年間、このたびの総会にて、藤倉洋一さんに無事バトンタッチ致しました。この間、皆様の支えでこの伝統ある「東京外語仏友会」の会長を務めさせていただいたことは、私にとってまことに名誉なことでありました。皆様のご協力に厚くお礼申しあげます。

仏友会との初めての出会いは50数年前のことで、まだ学生の時、なぜか仏友会の総会に出席していました。会場は「椿山荘」、そこで初めて当時会長の後藤篤さんと会いました。その時の握手が今につながったのでしょうか。



## 《春の総会》

第16回総会が、4月21日(土)、東京・大手町サンケイプラザで開催された。出席者は56名で、旧交を温める懇親の場となったが、恒例の講演会は「バラから始まる西洋美術史」の演題で、キュレーター・明治大学非常勤講師の宮澤政男さん(昭56年)に話をいただいた(写真=右下)。以下は宮澤さんご本人による纏めをご紹介します。

## 「バラから始まる西洋美術史」

宮澤政男 (昭56)

「バラとユリの文化史」。今から思うと外大では随分と勝手なテーマで卒論を書かせてもらったものだと思う。子どもの頃から花が好きだったことがそんなテーマに結びついていったのだと思うが、就職に直結するようなものでもなく、結局ファッション雑誌の編集をする会社に入るもその軽さに耐えられず数か月で退職。卒論に書いたことに少しでも近い方向にと、美術史を学ぶことに決め、翌春に学習院の大学院に入学した。

植物好きだった私が選んだ研究テーマはアールヌーヴォー。19世紀末のヨーロッパにおける美術様式で、繁茂する植物の莖を思わせるしなやかな曲線使いが特徴である。具体的にはベルギーのヴィクトール・オルタという建築家の仕事を追うことになったのだが、絵画と違い実際に現地に行って作品を見ない

ことには始まらない。そこでベルギーの政府留学試験を受けたところ合格し、1985年から86年にかけてブリュッセル自由大学に留学した。

幸いオルタの建築の内部も多く見る事ができたが、留学での最大の収穫の一つは、西欧の都市では家と家の間に隙間がないという単純な事実を知ったことだった。ブリュッセルでは京都の町屋のように家が奥に伸びているので内部が暗い。そこでオルタは天窓から入ってくる自然光を活用し、建築の内部に鏡やガラスを多用することで明るい内部空間を出現させた。また、住宅建築に鉄材を用いることで、植物の蔓のような線的な装飾要素も生み出した。例えば照明器具は、さながら鉄の莖の先端に咲いた花のようで、機能と装飾が一体となっている。植物好きだった私がこのような建築に魅了されたのは当然の成り行きだったと思う。

この留学中、実にいろいろな出会いがあり、結局ベルギーの美術品運送会社に就職を決めることになった。一度帰国して修士論文を書いて、ベルギーに再度旅立ったのだ。当時はまだバブル経済で、日本から美術品を買いに来る人が多く、その世話をするだけで結構仕事になった。日本で新聞社が開催する美術展のお手伝いをするのも、次第に私の重要な仕事になっていったが、現在の学芸員の仕事につながったのはこの仕事だった。そしていつしかバブルははじけ、この運送会社は倒産。私はフリーランスで通訳やガイド、美術展のお手伝いなどをし

約20年前ころから東京外語会の活動の一端を担い、後藤さんとも親しくさせていただきました。その頃の仏友会は、後藤さんを中心に短人数で散発的に続けられていましたが、現在のように仏語科全体に広げることはできませんでした。1996年に後藤さんが100歳で亡くなり、その遺志を継いで再開しようという声が、田島宏先生、小山房二さんらを中心に上がり、その年、故後藤会長追悼の席で「新生東京外語仏友会」が生まれたのでした。以来16年、故田島先生を中心とした熱心な方々のご努力により仏友会は活動を続け今日に至っています。

この4年間、活動はお陰さまで円滑に進められ、春の「総会・講演会」、秋の「ボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会」の2つのイベントを中心に集まり、会員も400名を越えることとなりました。年2回の講演をお願いする講師を色々考えるのも大変ながら楽しいもので、沢山の才能ある方々をご紹介できていると信じています。

また私の個人的な長年の希望であった「仏友会誌」が「La Nouvelle」という名で年2回発行の運びとなったことは、本当に嬉しいことでした。それは、昭和初期に発行された古い「佛友会会報」がいくつか発見されて、そこで見る先輩たちの意気に触れ、現在の仏友会活動も是非とも活字を通して後世に残したいものと思ったからです。模索しながらも楽しく編集し、現在8号を数えるまでになりました。

これからは後輩たちの手になる「La Nouvelle」を楽しみに、そしてバラエティに富んだ講演会、そして「美味しいワインパーティ」を楽しみに待つことと致しましょう。

(2012.7)

たが、ベルギーで暮らしはじめて10年たったころ、現在のBunkamura ザ・ミュージアムから誘いがかかり、帰国してその学芸員として働くこととなった。

Bunkamura ではベルギー関係の展覧会ばかりはできないが、できるだけベルギーものを取り入れた。そんな中で出会ったのが、ベルギー出身の植物画家ピエール＝ジョゼフ・ルドゥーテだった。宮廷画家としてフランス革命の混乱の時代を生き、大著『バラ図譜』を残したこの画家の展覧会を最初に開催したのは、実は別の展覧会がキャンセルになったからだったのだが、結局は3回も開催することになってしまった。ただし3回目は、原画展として開催の予定で進めていたところ震災で取りやめとなり、代わりに『美花選』というルドゥーテの版画集による展覧会を開催した。同じ作家とはいえ2、3か月で新たな展覧会を作るのは至難の技だった。

今後も、延期となった原画展も含め、花ということにこだわりながら、展覧会を開催していければと思う次第である。



## 鎌倉でフランス語の観光ガイド

関口洋子 (昭44)

2007年末、鎌倉市観光協会の半年の養成講座を終え、外国人向けボランティア観光ガイドの活動を始めました。2010年には2期生を迎え、現在40名弱が英仏西伊葡中韓の7カ国語でガイドしています。私は英仏2カ国語担当です。このグループ名は皆で考えてKamakura Welcome Guide Association(KWGA)と決めました。

仏語でのゲストで忘れられないのは2009年8月に「日仏学生フォーラム」のグループ33名をガイドしたことです。その年の春、仏友会総会でお会いした現役学生に宣伝したところ、ガイド依頼メールが送られてきました。でも当時、残念ながら

仏語ガイドは私1人だけで、他は英語ガイドに対応して貰うしかありませんでした(今は2期生3名が加わり仏語ガイドは4名)。幸いゲストはENAやScience Po.等の学生と首都圏の大学生。皆優秀で英語もよく通じ、外語大後輩を含む同胞学生は仲間のガイド達から「我が子もこのように育て欲しい」「日本の将来に希望が持てた」とお褒めを頂くほどでした。

来日するフランス人旅行者たちは知識豊富で目的意識もあり、儉約家で歩くことを厭いません。好奇心も旺盛です。鶴岡八幡宮の舞殿で結婚式に遭遇し「角隠し」の角とは嫉妬だと知ると納得の表情。浄妙寺のお茶室では石庭の前に「悟り」「見立て」等、私の拙い仏語の説明を上手に言い直してもらうこともあり。長谷寺で写経する観光客を見て、代価

が支払われる作業と誤解したフランス人には、視点の違いを教えられました。

会議で来日したシスターたちからは、東慶寺(駆け込み寺)で「当時日本には尼さんは何人位いたの?」と予想外の質問。データがなく、代わりに「高貴な未亡人は尼さんになるのが習慣だった」「還俗して結婚する女性もいた」と答えました。宗教がらみは難しく、十分説明できたかどうか・・・

毎年のようにアフリカ諸国から透析研修に訪れる医療関係者をガイドするのも楽しみです。居ながらにして世界各地の人々と交流し、ガイドで喜んでもらえるのがこの活動の醍醐味と思っています。

お時間のあるときにどうぞ下記の関連サイトをご覧ください。

<http://www1.kamakuranet.ne.jp/kwga>

## 《新幹事からのご挨拶》

金澤脩介（昭43）副会長

仏友会は自分のため、そして皆のための知的で楽しいサロンです。フランス（語）科の卒業生（OB.OG.）はもとより、在学生も気軽に集い一緒に会を盛り上げましょう。そして明日への活力を養い、交流の輪を広げましょう。微力ながら気持ちを新たに会の維持・発展のお手伝いをしたいと思います。「仏友会はワインと共に！」皆様よろしくお願ひ申し上げます。

和賀千恵子（昭45）副会長

非力ながら、「つなぎ役なら〜」とお引き受けして早10数年。大先輩の中に現役学生が登場する場面は感激します。くつろぎと安らぎの中に多様な人々の参加が末長く続くことを願ひます。—仏蘭西の香が漂う同じ窓—

川口裕司（昭56）副会長

4月から言語文化学部の学部長に選出されたため、かなり忙しい毎日です。フランス語の授業を3コマ免除されたのはいいのですが、ちょっと寂しい思いです。今年度も語劇支援が可能なようでしたら、連絡役を仰せつかります。どうぞよろしくお願ひいたします。



松本伸夫（昭38）

田島宏会長、渡辺昌俊会長代行のとき、幹事を引き受けてから10年以上たちました。自宅に近い大学キャンパスの現役学生を老人パワーで仏友会に連れてくることを新たな仕事にしたいと思っています。

坂井英俊（昭和40）

多士済々の紳士淑女、新たに参加された極めて優秀な後輩諸君の間で、自分にもお役にたてることがあればと控えております。長い歴史の仏友会が永遠に続きますように。昔の会報にも「仏友会はおしゃれでモダンな集いだった」とあります。

富田和義（昭43）

引き続き幹事を務めさせていただきます。田舎で畑作業の毎日、知的作業には適しませんが、その分汗をかいて会の縁の下の力持ちに徹していきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

勝亦杏子（昭46）

今年度から名簿の管理とご登録の会員の方へのご連絡を担当

させていただくことになりました。仏友会がさらに楽しく、豊かな交流の場になりますように、微力ながらもお手伝いさせていただけたらと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

中村日出男（昭49）

今年選歴に到達しましたが、仏友会ではまだまだ鼻垂れ小僧。まだフルタイムで仕事をしていますので、幹事会に出られない時もありますが、微力を尽くしたいと思います。ワイン選びはお任せください。

田中清夫（昭51）

長野県上田市に在住しています。今年は選歴となりますが、仏友会では若輩です。遠方から参加ですが、週末行事にはできるだけ加わります。いづれ積極的に活動したいと思います。長野には、数人の仏語生がいます。



内海和夫（昭54）

旧宗主国たるフランスの正体を暴くべく昭和49年ベトナム語科から学士入学した硬骨漢も、二人のフランソワーズ・アルヌールとアルディーに魅せられて徐々に骨抜き。外語在籍越え通算10年の成果は未だに藪の中。

宮澤樹実子（平10）

まだまだ若輩者ではございますが、諸先輩の皆様いろいろな教えていただきたいと思っております。ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひいたします。



後列左から 内海、和賀、勝亦、中村  
前列左から 松本、金澤、坂井、富田 (以上11名)

## 第17回サロン仏友会のお知らせ

《講演とボジョレ・ヌヴオを楽しむ会》

日時：2012年11月17日（土）午後2時～5時  
会場：本郷サテライト3F・8F  
会費：3,000円  
2012年分通信費（1,000円）も同時に受け付けます。



《講演》 午後2時～3時半

講師：遠所尚志氏（昭和54年卒）  
NHK大型企画開発センター  
エグゼクティブ・プロデューサー

演題：「ドキュメンタリーにおける映像、そして音楽」（仮題）

NHKで一貫して報道系番組を担当してきた遠所さんは、話題となったNHKスペシャル『映像の世紀』や『新シルクロード』を制作するなど活躍されていますが、今回は、映像文化と音楽について語っていただきます。

《ワイン・パーティ》 午後3時半～5時

10月半ばに、メールアドレスを登録している会員にはE-mailで、その他の会員には往復はがきで個別にご案内します。申し込み〆切は11月5日を予定。

連絡先：藤倉洋一（昭45）

fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp  
Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子（昭46）

anzuko@k08.itscom.net



## 前年度会計報告

【仏友会 会計報告】（2011年4月1日～2012年3月31日、単位：円）

取入		支出	
前年度繰越金	939,056		
2011年総会費	327,000	2011年総会費用	377,009
通信費等	222,100	「LA NOUVELLE」発行費用	148,100
秋のサロン仏友会会費	180,000	秋のサロン仏友会費用	233,138
		外語語劇支援金	30,000
寄付金	16,170	ゆうちょ銀行振替手数料	11,320
		雑費（文具、郵送料）	11,596
通常貯金利息	159		
合計	1,684,485	合計	811,163
次年度繰越金	873,322		

## 昔日の青春 佛友會々報

### 80年のタイムカプセルを開ける 4

坂井英俊（昭40）

昭和8年春刊行「佛友會々報」からの要約抜粋である。遠い時代の我々が、はたして大先輩方の、本当の胸のうちの襟を擦ることができるのだろうか。日本は前年の満州建国、5・15事件で軍国として完熟し、尋常小学校の「少国民」も「日本男児たるもの、人生は二十歳までと思え」と訓育され、やがて成人すれば今日か明日かと召集令状を待つ兵役期を迎える。そんな状況下でありながら、会報にみるかぎり彼らはみな明るく天真爛漫な日々を送っていた。が、それも胸の底には途方もない悲しみを秘めた、健気な「幸せの造形」だったのかもしれないと思えば、恵まれた現代の我々後輩の胸も疼く。

「私たちは激烈な入学試験をパスして憧れの外語に入った。仏蘭西語学習の第一歩を踏み出した四月十二日。ふと窓外を見ると、其処には曇りがちな東京の空へ向かって数知れぬたんぼが咲き乱れていた。陽の入らないバラックの中で勉強するものにとって、美しい慰みである。学校中の誰でもが、猛烈に勉強している。が、そのために健康を害する者が多いといふ事は寒くすべき事であり・・・」と、いじらしい草花を愛でる心、刻苦勉勵の日々を伝える高橋敏男氏。また、会計委員某氏は「会員諸兄よ、もしもこんなみじめな幹事達に同情して下さるなら、仏友会にこれ以上の活動を期待して下さるなら、年に一円の会費だけちけちしないで納めてください、否、一円や二円の会費はおろか、たまには十円札でもボンと投げ出して気前のよいところを見せていただきたいものです・・・我々気の小さい幹事共が驚いて眼を回すといけない等と心配なさらぬで・・・」と。また4月6日にはフランスの巡洋艦ジャンヌダルクが横浜に寄航した。フランス語の学生たちは海軍士官らの応対に出て美

しい白人青年らの明朗さに圧倒され、習いたての外国語が実際に通じたことには感激して「自分もフランス人になりたい」とまで記す。そして「いよいよ夏です。暑いなんて不平を云ふ奴ははっというて、私達は夏に、神に感謝しなくてはなりません。スカートは短く、薄くさせるのは神の作り給うた夏ですぞ。おお神よ！もっと暑くし給え」。

彼らの文面はことさら没社会的に生活レベルに紡がれている。当時の尋常小学校生徒が書いた卒業式の答辞（大仏次郎記念館）、その格調高い漢文をまじえた作文は今の大学生には書けそうにもない達意の文であるが、それに比べ「学識ある」はずの当時の大学生が、社会的存在としての自覚を隠したいかのように、無心な文面を綴るのである。あるいは、軍国完熟の時代、「特高警察」による思想統制への慢性的恐怖や世間への遠慮が若いインテリ層の隅々まで行き渡っており、こうしたアルカイックな物言いが日常化・たしなみ化していたのでもあろうかと思うほどに、涙の乾いたばかりの子供のように素直なのである。

「大日本帝国」は非難的であった。（グラドストンの「小英国主義」が提唱されるなど）列強は植民地拡大がすでに得策とはいえぬ時代に入ったことを知っていたのだが、日本は遅れて乗り出し「満州進出は我々の死活問題である、諸国は了承されたい」と、得られるはずもない「了承」のお墨付きを世界に求めて、拒絶された。己の非を認めず相手を露骨に責める「小人」外交の最前線である、「英国はじめ各国は強奪した植民地から存分に甘い汁を吸いながら一等国日本の邪魔をするのか」日本は憤然と国際連盟を脱退し、開き直って満州へ侵攻する。日本は世界を見下し、世界は日本を見下した。アジアを利用せんとする日本を、アジアも利用せんとした。会報の第一面、町田梓棲先生は「フランスはなぜ国連で日本に味方しなかったか」と題し「日本の敵でも味方でもな

いフランスは連盟理論につかざるをえず、欧州政策の根底を破壊することができなかったのだ」と遠慮がちに擁護されている。同じ第一面、増田俊雄先生は「徒らに自負心が強く外国語や宣伝が極めて下手なのが日本人である。日本のことを色々尋ねられたりして祖国を説く好機に恵まれても、物言ふ術さえ知らないから遂に相手の微笑を買ふに止まる不甲斐なさである。国際会議に臨む日本の委員は無言の行に終始し、形勢不利と見るや部下を叱咤し・・・」と慨嘆される。世界とわたり合える人材の育成を至上目標に掲げた東京外語大であればこそ、これは基本指導でもあったろう。

そもそも「和を尊び露骨なくことあげ」を慎む島国の民に脈々と伝わる美質を察してくれるほどには、白人の世間は甘くはなかった。「近代化」の精神とは、欧米世間と対等にわたり合っただけのような明晰・合理・実益の精神であった。が、是非はともかく日本人には古来の「以心伝心」、無言で思いを伝え合う洗練された所作も浸透しており、あざといまでの言語「ロゴス」の民たる白人の世間に、典雅な「奥ゆかしさ」の美学や「気配」の文化などが通じるわけもなく、ために日本人はその「あいまいさ」を自ら否定し続けて百余年、その結果は昨今のような露骨・無恥な民の急増であり、日本人の民度は下がり品位は劣化するばかりだと悲憤慷慨するむきもある。しかし、これは個人差も大きく、時代に流されない毅然たる人格は常にあるので、無造作に断言できることではない。

さて、学園の外は息のつまる軍事一色であったが、外語の学生たちが、語学教育を通じて「自由と良心」の人格的影響を与える良き師に恵まれてもいたことが、会報には熱く活写されている。青年にとって、よき師にめぐまれるほどの仕合せはない。

（次号へつづく）

